

違反抑制を促す警告表現とその表示タイミングの効果に関する研究

五十嵐 彩那

【目的】私たちの身の周りには、様々な規則が存在する。規則からの意図的な逸脱、すなわち違反の種類や被害の程度は多様であり、安全・快適な生活のため、違反の抑制が望まれる。現実場面への応用や長期的な効果の必要性から、標識のようなメッセージに着目した。本研究の目的は、提示するメッセージの表現やそれを表示するタイミングを操作し、違反を抑制することであった。メッセージの表現としては禁止型(「～禁止」)とお礼型(「～ありがとう」)、表示のタイミングとしては常時提示(違反の有無に関わらず常に表示)と随時提示(違反の有無に伴って表示)を設けた。標識のような、現実場面におけるメッセージ使用を考慮して、時間経過後の違反抑制効果についても検討した。互惠性規範や心理的リアクタンス、客体的自覚理論に基づき、以下の3つの仮説を立てた。仮説1:禁止型よりもお礼型の方に違反抑制効果がある、仮説2:表示タイミングに関して、違反に対し随時提示されるメッセージの方が、違反の有無に関わらず常に提示されているメッセージよりも効果があり、違反が少なくなる、仮説3:提示を継続した場合、お礼型のメッセージは時間が経過しても違反を抑制する。

【実験1】自作のコンピュータゲームを用いて、ルールとされた動作順序に対する違反を観察した。参加者は、禁止型/随時提示条件、お礼型/随時提示条件、禁止型/常時提示条件、お礼型/常時提示条件のいずれかに割り当てられた。その結果、禁止型よりもお礼型のメッセージを提示された場合に違反が少なかった。また、ゲーム開始から時間が経つと、禁止型とお礼型の間で違反抑制効果の差が大きくなり、お礼型の違反抑制効果が継続することが明らかになった。常時提示と随時提示の間に違反抑制の差は見られなかった。

【実験2】実験1においては、自身のおかした違反が違反と認識されていなかった可能性があること、また違反とメッセージ内容の対応関係が不適切であったことなどに問題があった。実験2ではそれらを改善し、ドライビングシミュレータによる走行課題を行った。ここで違反は制限速度の超過であった。課題終了後、質問紙により、メッセージが参加者の心理的側面に与える影響を調査した。実験結果より、速度低減を広い意味での違反抑制効果とみなし、その程度について各条件にて比較した。その結果、禁止型とお礼型で速度の差は見られなかったが、質問紙の分析から、禁止型よりもお礼型の方において違反抑制効果が高いことがわかった。また、時間経過後もお礼型は速度上昇を抑制するが、禁止型は速度上昇を抑制しなかった。これらは実験1の結果と一致する。また表示タイミングによる速度差は認められなかった。

【総合論議】2つの実験より、禁止型よりもお礼型の表現の方が、違反抑制に対して有効であることが明らかになった。また、メッセージが提示されてから時間が経過しても、お礼型の違反抑制効果は持続することが示された。表示タイミングに関しては、随時提示と常時提示に違反抑制の差が見られなかったが、この理由として参加者に随時提示の意味が正しく認識されていなかったことが考えられ、実験デザインを変更するなどして再検討する必要がある。本研究は、お礼型のメッセージが禁止型のメッセージよりも違反を抑制するという結果を示した点で、違反の抑制に禁止の表現を用いることが多い現状に疑問を投げかけている。しかしながら、現実場面に本研究結果を応用するためには、より長期間の検討や、状況依存的規範・信頼性などの個人差を排除した検討を行う必要がある。また、お礼型のメッセージは規則違反だけでなく、迷惑行為などにも応用できると考えられるため、さらなる研究により、その適用範囲を広げる必要がある。(安全行動学)